

だいいこく通信 第四十一号「春の号」

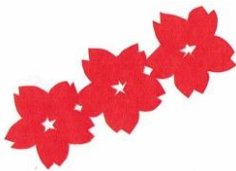
いづみ

昨年十二月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は世界的な規模で流行しており、日本でも患者が増加しています。小学校から高校までの一斉休校、マスクやロールペーパーの品不足など、市民生活にも大きな影響が出ています。この間、さまざまな情報が飛び交い、中には不正確なものも混在しているようです。できる限り正確な情報をもとに冷静に行動することが求められています。一日も早く事態が収束することを祈るばかりです。

社報「だいいこく通信」第四十一号をお届けします。

今回の内容は、当神社主催の催し物についてのご案内、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キヤクターたちが活躍する連載まんがなどです。連載まんがでは新キャラも登場します。お楽しみいただければ幸いです。

大國神社 宮司 大島資生



大國神社の今

○第九回だいいこく落語会を開催します【満席】

来る四月二十五日(土)に第九回「だいいこく落語会」を開催します。今回も古今亭菊乃丞師匠をお迎えしての独演会です。

お蔭様で満席となりました。ご了承くださいませ。



○第六回だいいこくクラシックス開催決定!

当神社の秋の催しとして開催しております「だいいこくクラシックス」、今年は十月十八日(日)に開催することとなりました。

今回は、元東京都交響楽団ヴィオラ奏者の中山良夫さんによるソロ・リサイタルです。通常は四本の弦をもつヴィオラですが、今回は珍しい五弦のヴィオラによるコンサートで、バツハから現代まで幅広いレパートリーをご披露くださいます。詳細は夏以降にお知らせいたします。どうぞご期待ください。

お宮あれこれ 端午の話

日本の暦には「五節句」と呼ばれるものがあります。一月一日の「人日」、三月三日の「上巳」、五月五日の「端午」、七月七日の「七夕」、そして九月九日の「重陽」です。古代中国の陰陽五行説では一・三・五・七・九の奇数を「陽数」とする考え方がありました。それゆえ、一月一日のようにこれら奇数月で、しかも月と同じ数字の日には特別な意味合いを持たせたのでしよう。今回はこのうち、五月五日の「端午」についてお話しいたしましょう。

「端午」の「端」は「初め」という意味で、「端午」はもともと月の初めの午の日をあらわしており、古代中国の漢代以降に、五月五日のことをさすようになりました。漢代の『荊楚(けいそ) 歳時記』という書物には五月は悪月であるという記述があり、特に五月五日生まれの子どもは長じて父母に害をなすという俗信があったそうです(このことは日本にも伝わり、平安時代の『大鏡』序にも触れられています)。

こういったことを背景として、中国では端午は毒虫や悪鬼をはらう日とされたようです。蓬(よもぎ)で人の形を作った「艾人(がいじん)」や「艾虎(がいこ)」を家の門や戸に懸けて毒気を払いました。「艾」は「蓬」と同じく「よもぎ」のことです。

蓬は日本でも薬草として知られています。古代日本では主として五月五日に野山に出て薬草または鹿の新角(袋角)を採集する風習があり、「薬獵



(くすりがり)」と呼ばれました。この行事は『日本書紀』推古紀や『万葉集』巻一六にも記されています。また、この日を「薬日(くすりび)」とも呼ばれたとのこと。蓬を使った草餅は今でも端午の頃によく食べられています。

「薬日」という言葉は鎌倉時代後期の『夫木和歌抄』七にも見られます。「薬日のたもとに結ぶあやめ草」(恵慶法師)というのですが、ここには端午とかかわりの深いもう一つの植物である「あやめ(菖蒲)」が登場しています。菖蒲には強い香りがあり、葉が剣の形をしているため、古くから魔よけとして使われ、邪気を払うと信じられました。実際、根を煎じたりおろしたものは、胃痛、発熱、ひきつけ、傷などの民間薬とされたそうです。

平安時代の『続日本紀』天平十九年(七四七)五月庚辰(五日)条にはつぎのような記述があります。「是日、太上天皇詔曰、昔者五月之節常用菖蒲為纒(かつら)、比来已停此事、從今而後、非菖蒲纒者勿入宮中」「菖蒲纒」というのは菖蒲で作ったかずらで、中断されていた習慣を復活し、端午の節の行幸・節会などに天皇をはじめ諸臣に至るまで、災いを避けるために菖蒲纒を冠に付けたのでした。この習慣は平安時代には盛んにおこなわれたようで、『枕草子』にも「節は、五月にしく月はなし、菖蒲・蓬などの薫りあひたる、いみじうをかし」と、宮中の華麗な行事の様子が記されています。菖蒲で薬玉を作って身につけたり、柱にかけたりしたほか、飾粽(かざりちまき)とも合わせて贈答し合いました。また菖蒲の長さを競う根合(ねあわせ)も行われ、民間でも子どもたちが草合をしたり、菖蒲刀を腰に差し菖蒲で作った兜や菖蒲鬘を付けたりしたそうです。

中世以後、端午の節句は武家行事として行われるようになり、やがて「菖蒲」（シヨウブ）の音が「尚武」（シヨウブ）に通ずることもあって、近世では男子の節句として盛んになりました。民間でも武者人形・鯉幟・菖蒲刀（飾りをつけた木刀）・粽・柏餅などを作る



ことが広く行われ、印地打（石合戦）・凧上げ・競漕（小船を漕いで速さを競う）などの競技行事が、菖蒲湯・菖蒲枕（勝負を枕の下に敷いて寝る）・菖蒲酒などとともに定着しました。菖蒲の葉や根を入れてわかした菖蒲湯はからだを浄め邪気を払うとされ、この習慣は今日まで続いています。

なお、端午の節句のことを「女の家」と呼ぶ地域があるようです。これは、田植を前にしてシヨウブやヨモギをふいた家に女性が忌みこもる行事であったことによるといいます。

以上お話ししてきたとおり、長くて少々複雑な歴史を持つ端午の節句ですが、邪気をはらって、健康な毎日を過ごしたいという気持ちは昔も今も変わらないということがわかります。今年の五月五日には昔から伝わる習慣にぜひ触れてみていただければと存じます。



祭礼・祈祷などのご案内

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは次の電話番号もしくはメールにてお願いいたします。不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しくください。のちほどこちらからご連絡いたします。

○諸祈祷受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈祷を行っております。祈祷日時については、お電話にてご相談ください。

〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話 ○三―三九一八―七九三〇

携帯 ○八〇―一九八七―八七二六

eメール daikokujinja@gmail.com

○次回甲子祭

令和二年五月二十一日（木） 午前五時～正午

○開運千人講祈祷祭 毎月一日 午前六時～正午まで



次号発行予定

「だいいこく通信第四十号」、いかがでしたか。次号「夏の号」は、令和二年七月二十日の甲子祭に発行予定です。



「だいいこく通信」第四十一号 令和二年三月二十二日発行

編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇—〇〇〇三 東京都豊島区駒込三—二—十一

<http://www.daikokujinja.org>

(連載まんが)

大吉うさぎ ～ご先祖様のお話～

くま こまち 作

